



村はずれの道のゆるくカーブしている茶店でまた絵を描いている。夜が明けて少したった村はずれはリキシャが時折仕事に行く人を乗せて走っていき、裸足の子供達は本を持ってゆっくりと学校へ向かっている。

店の前は働きに出かける若者達があつまり、親父さんが次々と揚げてゆく揚げ物や、チャパティを買い、少年が入れる紅茶と一緒に朝の食事中だ。少年は小さなティーカップにお盆の汚れた水をちょっと入れてすすぐと、缶のコンデンスミルクを1cm程入れて、熱い紅茶を手早く注いでから湯気を立てて小さなスプーンで熱いよくカチャカチャ音を立てながらかき回してゆく。一杯4円のお茶を受け取った村人はまた数円を出してビスケットを一枚買い、お茶に浸して口に運んだ。店の奥では気むすかしげな老人が、いつもの習慣通りに店の決まった席に座ってお茶を飲んでいる。少年は店に入った私たちにお茶を出しながら、好奇心の目がきらきら輝いて話しかけたくてしかたがないけれど、恥ずかしい気持ちも大きくて、でもつい手元がおろそかになって、かまどの前でいそがしそうなおやじさんの「ほら、次のお客が待っているぞー!」というような

声にひょいとびっくりあわてて又お茶つくりにとりかかると、目はどうしても変な外人(私たちのこと)から離れない。外は相変わらず時折リキシャが通り、ベビーと呼ぶオート三輪がにぎやかに走りすぎ、その向こうのヤシの木の先は田植えのほぼおわりつつある水田がさわやかに広がっている。

見慣れた一時だ。こんな光景の中で何度絵を描いただろう。しかし未だに、なんでそこで自分が絵を描くのかという理由がわからないのだ。絵描きは絵を描き、写真家は写真を撮る。言葉をあやつる人たちは文字を書き記してゆく。初めてのヒマラヤの時は何しろ大量に描いて撮った。まるで末期の目のような感覚だっただろう。しかし、いくら描いても、どれだけ撮っても、その膨大な質量は何の役にたったのだろう。

もし、何かの役にたったのだとしたら、それはこの煤で汚れた壁際、ギシギシ言う黒い椅でこうして、鉛筆を動かして、ほぼえみながら少年の目をじっと見ていられるこの時間にたどりついたことではあるまいか。いずれそんな記憶と共に遠く立ち去ってゆくのだが、今、こうして、なんのけれんみもなく、暖かい気持ちでまっすぐたくさんの人たちの目とおだやかにむきあえるこの時間にたどり着いたことが、結果であるとお茶のやわらかな湯気の中から、スケッチブックを介して向き合ってきたあらゆるものに宣言したい気持ちになってきた。そう、ムダなことをしてきたわけではないんだと。おかげでいつまでたっても貧乏人だが、財産を抱えてあちらの世界にいけるわけでもあるまい。一步一步が今に続いている喜びでいいではないか。

仕事に出て太陽にあえぐ屋になった。村のばあさんは若い者に命じて木を揺すってたくさんの甘酸っぱい木の実を落としてくれた。唐辛子を付けて食べるともおいしいと、しわの顔をおもいきり笑顔にさせた。子供達は勢いよく流れる用水路を喜々として流れてゆき、ゼネスト帰りの青年達は興奮してモスクの回りを埋め、異国の博士達はしんとした会議室で静かに笑い、色とりどりの、野菜や果物、肉や魚がたくましい男達や女達と一緒に市場を埋めており、コーランが人々の頭上に降り注いだ。

何日かをバングラディッシュで過ごすことが出来ました。4つの村に便所を作る計画に参加して、村の地図を作ったり、全部の便所を点検して回ったり、直す所はなおしたりしてきましたが、本当のところ、食物連鎖のなかでひとがどのようにヒトであるのかということ、わかっただけのために行ってきたのだと考えています。

3月の「まなざし」の編纂は19日ですがまだ未定です。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>  
TEL/FAX03-5600-0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com